

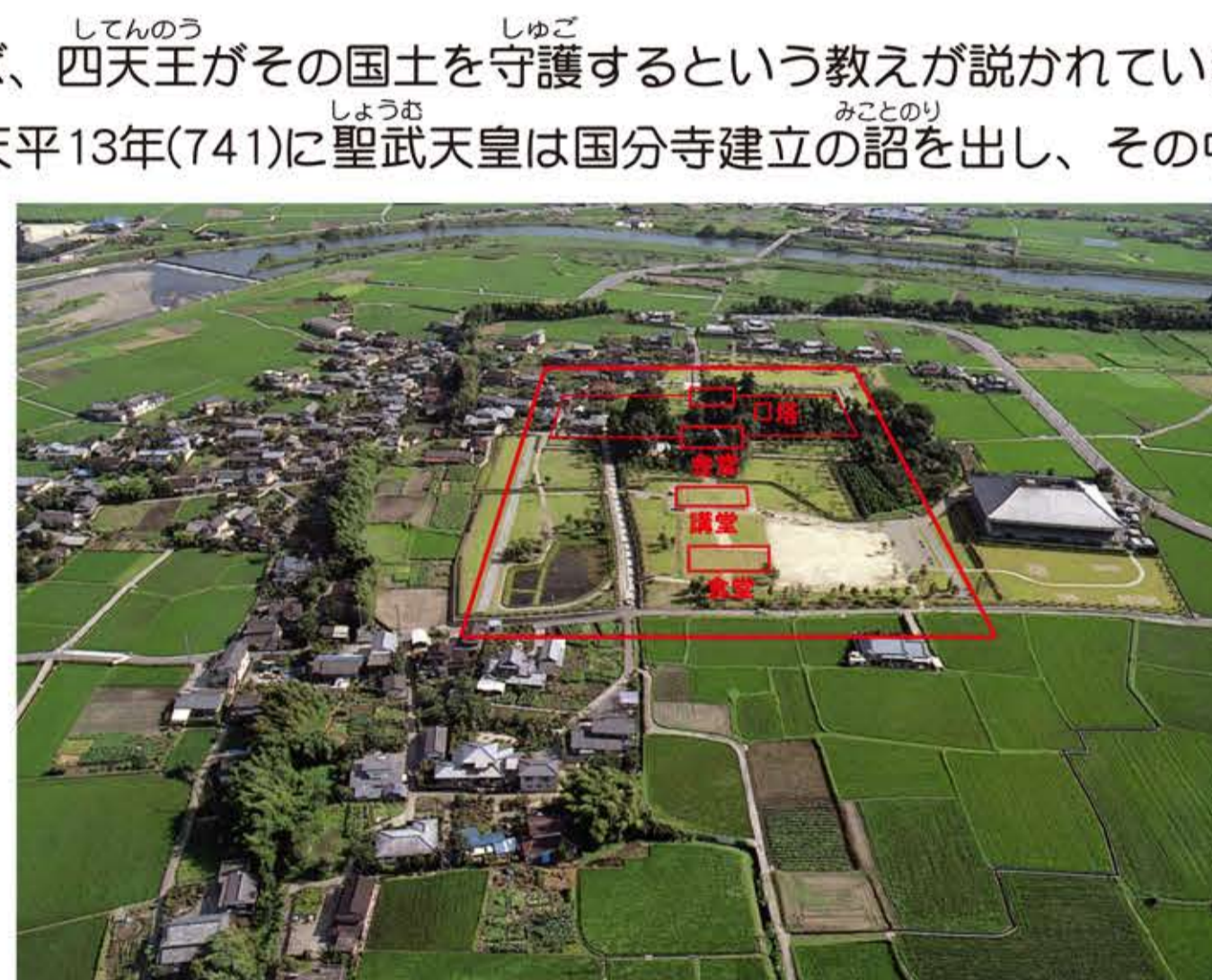
大分の史跡－豊後国分寺跡－

国分寺とは、^{こくぶんじ} 金光明最勝王經という護国經典の教えに基づき、国土の安定を祈って国ごとに建立された寺院の総称です。豊後国分寺跡は、JR久大本線豊後国分駅に隣接した、大分川左岸の国分の台地にあります。昭和8年(1933)に国の史跡に指定され、現在は寺域跡の約32,000㎡が史跡公園として整備されています。

造塔の寺は国の華

最勝王經には、国王がこの經典を信仰すれば、^{してんのう} 四天王がその国土を守護するという教えが説かれています。奈良時代、全国的な飢饉や疫病の流行などによって天皇の権威が失われつつありました。そこで、天平13年(741)に^{しょうむ} 聖武天皇は国分寺建立の詔を出し、その中心となる^{ななじゅうのとう} 七重塔に天皇直筆の金字金光明最勝王經を納めることで、天皇の存在を前提とした^{ちんごこっか} 鎮護国家思想の全国的拡大を目指しました。詔の中には「造塔の寺は国の華であり、必ず好所を選ぶこと」と記され、七重塔の建つ国分寺をいかに重要視していたかがうかがえます。

豊後では国分の地が選ばれ、発掘調査などによって、寺域が東西約182m・南北約300mの広さを有し、門・七重塔・^{こんどう} 金堂・^{こうどう} 講堂・^{じきどう} 食堂など壮麗な建物が南北に並ぶように建っていたことが分かっています。



豊後国分寺跡全景



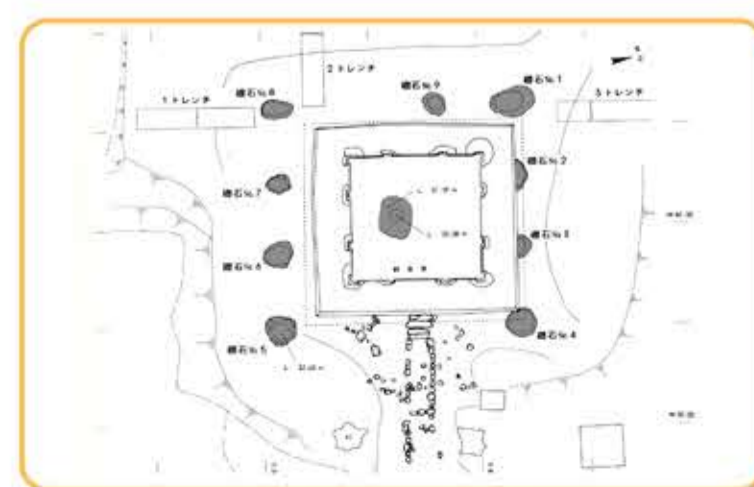
豊後国分寺復元模型

全国屈指の規模を誇った七重塔

豊後国分寺に建てられた七重塔は、現在も残る^{そせき} 礎石や^{きだん} 基壇の大きさから高さが60mを超え、全国の国分寺の中でも屈指の規模を誇っていたと考えられています。朱色の壮大な塔は、当時の豊後国を象徴する建物としてそびえていたことでしょう。



豊後国分寺跡周辺地図



七重塔跡実測図

